
この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章～どうか壊さないで、貴方の望む幸福を～》

煌はじめ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章》どうか壊さないで、貴方の望む幸福を《

【Nコード】

N5866Y

【作者名】

煌はじめ

【あらすじ】

『なんだよ、悪いのは風丸じゃんか！風丸なんかだいっきらいだ！！』

数年前の幼

き日。円堂守は他愛のないことで親友だった彼と喧嘩をし、そんな言葉を投げつけた。当たり前の幸せが当たり前にあることを疑わなかった咎。次の日には当たり前のように仲直りできる筈だったその小さな争いが、未来を狂わせるなどと誰が予想しただろうか。

明かされた過去の罪。魔女と交わしてしまった愚かな契約と、愛する仲間の死。度重なる悲劇。皆を太陽のように導いてきた円堂の心はついに砕けてしまふ。その時彼を愛する者として、秋がとった行動は一つだった。

同じ時、愛媛でもまた運命が動く。エイリアの使途達に追い詰められ、満身創痍で逃げ続ける不動。彼の心の叫びを聴いた小鳥遊は、犠牲を覚悟で単身救出へと向かう。全ては愛する者と生きる為に。

円堂。秋。小鳥遊。そして反逆を決意するエイリアの子供達。止まない雨の中、それでも希望の歌は響くのか。

残酷で美しく脆い、後に

伝えられし『エイリア事変』。これはその、もう一つの物語。その第四章。

はじめに。

この作品は、イナズマイレブンの二次創作小説『この背中に、白い翼は無いとしても』第二章・どうか畏れないで、目の前に在る真実を』の続編になります。公式とは一切関係がありません。また、以下の点が含まれます。

イナズマイレブン二期（驚異の侵略者編）をベースにしたパラル。

原作沿いと見せかけたサッカーバトルファンタジー。最終的には原作とまったく違った展開と結末が待っています。

闇堕ち要素、死ネタ要素強し。残酷な生体実験描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15指定。

エイリア学園はマスターランク以外洗脳されている設定。

全てのキャラクターにおいて過去捏造だらけ。

塔子と鬼道が幼なじみ設定。この二人で恋愛描写あり（プラトニック）

他ウルビダ×ヒロトと小鳥遊×不動要素が若干あり。

鬼道やエイリアっ子をはじめとして、悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。

うみねこパロ要素あり。全ての悪事の黒幕として魔女が登場。

ディシディアファイナルファンタジー、キングダムハーツ、すばらしきこのせかい、からゲストキャラ出演。ただし上記キャラを知らずとも支障なし。

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表

現があるかもしれません。

基本友情重視ですが、塔子×鬼道、ウルビダ×ヒロト、小鳥遊×不動以外にも公式の恋愛描写は若干あります。夏未↓円堂↑秋、リカ×一之瀬は強めかも。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。

序章を読まれた方ならご存知の通り、序章終盤にイナズマイレブンのキャラから死人が出ています。また今後もある予定ですし、生き返り…なんて非常識展開もあったりします。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。長い長い物語になりますがお付き合いただければ幸いです。

オリジナルキャラクター紹介

この作品にはオリジナルキャラクターが登場します。ただし、以下出張るのは二名のみ。またあくまでメインは版權キャラクターになります（個人的にオリジナルがたくさん出る＆メインに来る版權小説は苦手なため）。

サクラミサトヤ 桜美聖也

雷門中三年の男子生徒。最近転校してきて、サッカー部に入部した。ポジションはMF。

青みがかった黒髪とキャップが特徴。群青色の瞳の中性的な容姿。黙ってれば相当な美形。が、とんでもない方向音痴。運動神経は良いのにドジ。さらに、可愛いコを男女問わずお持ち帰りしようとする問題児。雷門中の数少ないギャグ要員である。

体力馬鹿で怪力馬鹿だが、コントロール音痴すぎて試合ではあまり戦力にならない。そのせいかMFよりDFを任される事の方が多かったりする。必殺技は、彗星シュート&アポカリプス（オリジナルブロック技）。

FFで帝国地区予選の際、鉄骨の下敷きになりかけたにも関わらず足の骨折だけで済むほど丈夫。また、どこかの国の軍に関わる仕事をしていると噂であり、謎の多い人物である。

外見は中三だが、見た目通りの年齢ではない。天涯孤独となった吹雪の面倒を見ており、今でも仕送りは欠かしていない。

その正体は、S級犯罪者・災禍の魔女アルルネシアを追って、異世界からやって来た創造の魔女キーシクス。性別年齢外見を自在に変える事ができる為、普段は少年の姿をしている。が、性格と喋り

方は完全に素のまま。

ニノ宮蘭子
ニノミヤランコ

吉良星二郎直属の警護頭にして秘書官。エイリア石に関わる研究と実験を推し進める科学者達のリーダーでもある。

後ろでくくった茶髪のおかっぱが特徴。紅い眼をした、二十七歳くらいの妖艶な美女。ある日突然吉良の元に現れ側近になった為、エイリア学園メンバーからは多かれ少なかれ疑念を抱かれている。

冷酷で身勝手なサディストであり、ガゼルを始めとした多くの子供達に嫌われている。実は、全ての事件の鍵を握る存在である。

その正体は、自分の喜悦の為にあらゆる世界を混乱に陥れてきた災禍の魔女・アルルネシア。死者を自在に生き返らせ、駒として操ったり、人々の心の負の要素を増幅させ洗脳する事が出来る。

人間をゴミとしか思っておらず、良識などひとかけらも持ち合わせていない。聖也いわく、“最低最悪の愉快犯”。

【4・0・Message from Mamoru Endou】

考えちゃいけない事だと思う。

でも気付けば、考えちゃってるんだ。

俺とさえ出逢わなければ、俺さえいなければ。

風丸を不幸にしないで、済んだのになって。

『わあ…』

初めて出逢った日のこと、お前は覚えてるかなあ。

幼稚園の時だ。稲妻幼稚園は男女の服の違いが分かりにくいデザインだったから、俺最初、お前を女の子だと思ったんだ。

一番最初に目に入っしたのは、すつごく綺麗な水色の髪。

『きれーい…』

『え？』

さらさらと、まるで風が流れるみたいで。俺はつい触っちゃった。初対面なのにいきなり髪触られて、風丸ってば目をまんまるくしてたよな。

『きれいだなー。おれ、円堂守！キミ、ベッピンサンだーってよく言われない？すつごくきれいな、かみ！』

その言葉に、風丸はポカンとして――次の瞬間。

『おれは！男だあつ！！』

いきなり、パンチが飛んできた。そりやもう盛大に吹っ飛んださ。どうやら“別嬪”という言葉が基本的に女性に向けて使うものだと知っていたらしい（父ちゃんが使うのを聞いて真似してみたのだ。

確かにあの時相手は親戚の女の子だった気がする）。

多分、風丸は幼い頃から、女の子みたいな自分の容姿を気にしてたんだろう。綺麗、と言われる事すら嫌だったのかもしれない。俺はものの見事に地雷を踏んじまったわけだ。

『これ以上よけいなこと言ってみろ！マジでぶつとばしてやる！！』

そして愛らしい見た目と裏腹に。大変男らしい、もつと言えかなり喧嘩っばい性格をしていた。白状する、俺はこの日風丸に数回パンチとキックをくらって思いきり泣かされたんだよな。

正直、風丸と喧嘩して勝った試しがない。小学生時代や幼稚園時代は俺の方がちよつとだけ大きかったのにな。めちやくちゃ喧嘩が強かった。きつとコンプレックスを克服したくて、やや間違った方向に男らしくしようとしてたんだと思う。

サッカーは、気がついたら当たり前のように傍にあった。

母ちゃんはじいちゃんの事があつて、サッカーが嫌いだったから母ちゃんの目があるところで堂々とやる事はばかられたけど。俺と風丸は、クラスのみんなと一緒にいつつもサッカーやってたっけ。そうそう。あれは、小学一年生の時。

覚えるかなあ、冬っぺのこと。本名は冬花で…あー、名字は忘れちゃったけど。稲妻町にちよつとの間だけいたあの女の子だよ。突然転入してきて、また突然転校して行っちゃったんだけど。

一年生の時は、よく三人でサッカーやったな。

きっかけは、冬っぺをいじめてたガキ大将達を俺が追っ払った事だっけ。最初は俺にさえなんか怯えてたあの子が、風丸には随分あつさり懐いたんだ。何でだと思う？

『だって風丸くんってすごく綺麗で…男の子ってかんじがしないから』

ははは、こりや参った。

風丸、結構へこんでたろ？さすがのお前も冬つぺに喧嘩は売れなかったみたいだしな。あつちに悪気があつたわけでもないし。

この頃までの俺達は、多分平凡で平和で――ありきたりな幸せに護られた世界に生きてたんだろ。そのままいけばもしかしたら、雷門サッカー部はフットボールフロンティアに出ないまま終わってたかもしれない。俺はこんなにサッカーに打ち込むことなく、普通に大きくなって、普通の大人になったかもしれない。

今ではもう、その全てが有り得ないと知っている。過去も未来も、いつの間にか全てが定められたものになっていたから。ああ、俺は否が応にも思い知らされた。

冬つぺが転校してから暫く後に起きた、あの事件。

ひよつとしたらアレ自体、アルルネシアが仕組んだ事だったんだろ。うか。

風丸が殺された。

俺は人殺しになった。

だけど起きた筈の悲劇は隠され、封印されてしまった。俺達の記憶も、周りの現実も、その先の未来も。全てが全て、魔女の手で改竄されたんだ。

死んだ筈の風丸と、俺が殺した通り魔の男は生き返させられた。生き返った通り魔を警察が捕まえるように仕向けたのも間違いなくアルルネシアだろう。風丸は襲われかけたけど助かった。シナリオはそう、書き換えられた。

でも、何もかもを忘れられたわけじゃない。記憶は消されても多分、俺達の心の何処かは惨劇を覚えていた。そして恐怖していたんだ。真実を思い出す事も、同じ事が繰り返すかもしれないという事も。

俺は、自分の罪を忘れて。

風丸は、自分が死者である事を知らずに。

俺達は運命に導かれるまま成長した。そして雷門中に入り、部活でサッカーを始める事になる。

風丸は俺の幼なじみで、だけどサッカーはやった事がない。きつとそういう“設定”にされていたのもあって、お前はその足を生かし陸上部に入ったんだろう。

よくよく思えば不思議なことはたくさんあったんだ。だってそうじゃん、サッカー殆どやった事ないのに、風丸ってば最初からサッカーが上手かった。初心者でいきなりリフティングを三十回続けてみせた時点で、やっぱり何かがおかしかった。だけどあの時の俺は風丸がサッカー部に入ってくれたのが嬉しくて、深く考える事もしなかったんだ。

きつと、何もかもが定められた“必然”だった。

俺が雷門中でサッカー部を率いたことも。

風丸がサッカーを始めた事も。

フットボールフロンティアにエイリア学園と、立て続けに闘いの渦中に放り出された事も。

そして - - “期限”が切れた時。風丸がもう一度何らかの形で命を落とす事になるのも。

何もかもが誰かの手の上で踊らされた、運命だったのかもしれない。

でもさ。

それでも俺、思っちゃうんだ。

たとえ俺達の過去が、俺達の力だけで切り開いてきたものでないとしても。全部が全部、俺達の意志で無かったとしても。

楽しかった。楽しかったんだよ、風丸。

お前と一緒にやるサッカー、すっげー楽しかったんだ。毎日毎日

みんなとボールを追いかけてさ、ゴールを目指して勝った負けたって――そんなシンプルな事が本当に楽しかったんだ。

だから否定したくないし、出来ない。そう思う事自体罪だとしても、俺はそこに風丸自身の想いが一つも無かっただなんて、思いたくないんだ。

最低だろ。

死者だとしても、お前がアルルネシアに生き返させられた事実さえ、肯定したくなってしまうなんて。

そもそも俺とさえ出逢わなければ、きっとお前は不幸になんかならなかった。死ぬ事も生き返る事も、魔女に弄ばれる事だって。

俺と出逢わなければ。

俺が“断罪の魔術師”の資格者でなければ。

俺とサッカーをやらなければ。

俺がサッカーをしてなければ。

そしてあの日、喧嘩なんかしなければ。

「なんだよ、悪いのは風丸じゃんか！風丸なんかだいつきらいだ！
」！

――ごめん。ごめんな、風丸。あんな酷いこと、言つてさ。

結局、謝っていない。思い出した時、君はもう世界にいない。

ごめんね、なんて遅すぎるけど。それでも言わせて欲しいんだ。

――大嫌いななんて、嘘だよ。本当は、大好きだったんだよ。

大好きな大好きな、最高の親友だったんだ。中学生になって、どんどん友達が増えて、最高の仲間がたくさんできてそれもそれは変わらなかった。

喧嘩つばやかった風丸は随分変わったよな。凄く目が優しくなっ

て、丸くなった。きっと本当の“強さ”ってヤツを真剣に考えてたんだと思う。だからまあ、考えすぎて悩んじゃう事も多かったんだよな。

今思うと、謝らなきゃいけない事だらけだった。この一連の戦いにしたってそう。お前の生真面目な性格を言えば、どれだけ精神的に追い詰められてたかなんて、簡単に分かりそうなものなのに。

『なあ…教えてくれよ円堂。俺達はいつまで頑張ればいいんだ？』

頑張っても頑張っても報われない。先が見えない。焦るばかりで、思うように動かない身体を引きずって、這いずるような日々。そつだよな。サッカーは楽しいもので――誰かに強制されて無理矢理頑張るようなものじゃなかったのに。

『みんながみんな！お前みたいに強いと思うな！！そもそも俺は…俺達は世界を救う為にサッカーを始めたわけじゃない！！そんな大それた目的、背負いきれるわけないのにつ…』

俺が、風丸にもみんなにも強制させてた。ルールを守った正々堂々としたサッカーを“やらなくちゃいけない”。

特訓して特訓して、もつともつと強く“ならなくちゃいけない”。勿論、そんなつもりなんか無かった。でもきつと俺は、俺自身が思っていた以上に余裕が無かったんだと思う。

俺、このチームのキャプテンなのにさ。自分の事だけで精一杯になって、周りの事がちつとも見えてなかった。風丸はあんなにはつきり、SOSを出してくれてたのにな。

ただ、楽しいサッカーで上を目指す為に。フットボールフロンティアで優勝する為に、風丸はサッカーをもう一度始めてくれた。俺の為に助っ人になってくれて、最終的に正式な部員になってくれた。

そうだ。風丸の言う通り。

世界を救う為に、こんな辛い闘いを強いられるだなんて、誰が予想してただろう。俺達、ただの中学生のサッカー部員だった筈だぞ？ おまけに――やつの思いで優勝したフットボールフロンティア制覇のその日に。積み上げた全てを否定されるような負け方するなんて、考えてもみなかった事だ。そこで心が折れても仕方なかったのに、風丸は俺に着いてきてくれたよな。

「…風丸」

呟きは、泣き出しそんな曇空へ溶けていく。

「俺だって、強くなんかないよ。強くなれるって、思い込もうとしてただけなんだよ…」

強いのは風丸、お前の方じゃないか。

たくさん、たくさん悲しい事が起きた。プライドをズタズタにされたあげく、仲間達が次々いなくなっていく。豪炎寺は行方不明。鬼道は殺された。佐久間や源田の魂は汚され、染岡は離脱して。イブシロンもジェネシスも、みんなみんな悲鳴を上げていて。

そんな中で俺はいつも無力。ゴールだけじゃない、みんなを護れる本当の守護神になろうって決めたのに――何一つ止められやしなかった。

なのにお前は、自力で立ち上がってみせたんだ。それが本当の強さだ。今の風丸は俺の何万倍も強い、うん、間違いない。

だから、さ。

お礼も謝罪も足りなすぎるんだよ。俺はまだたくさん、お前に伝えたい事があるんだ。なあ、聴いてくれよ。

あの言えなかった“ごめんなさい”。あの日の続きの、仲直りをしよう。今度はちゃんと声に出して本当の気持ちを言うから。許

せないなら、それでもいいから。

『サッカーやろうぜ、円堂』

お願い。どうか帰ってきて。

そしてまた、笑って。どんな風丸だって、俺の最高の親友な事に
違いはないんだから。

どうか、終わらせて下さい。

全ての悲しい事を。

誰か、嘘だと言って下さい。

全ては悪い夢だと。目を覚ました時夜は明けていて、朝日が輝い
ているから大丈夫だと・・・ねえ、どうか。

【4 - 1・誰かの為に、明日の為に】

佐久間は焦っていた。いや、焦りというより――歯痒くて仕方ない、と言った方が正しいかもしれない。

福岡で起きた出来事の全ては、渡されたノートパソコンのリアルタイム中継で知っていた。ジェネシスと雷門のあまりに悲しい試合も、そこで新たに犠牲者を出す事になった顛末も。

「くそっ……！」

車椅子を使い、動かない身体を無理矢理動かして進む。病院の廊下は静まり返っている。偶然なのか理由があるのか、今は廊下に出ている患者や看護士の数が極端に少なかった。

そして僅かにすれ違った患者達は、佐久間をちらりと見て（精々、車椅子がなんとなく邪魔だという程度の興味の無い目線だった）通り過ぎていく。尤も、今の佐久間にはどうでも良い事ではあったが、円堂にしろ風丸にしろ、特に親しい間柄というわけではない。むしろ一時は恨みさえしていた。彼らさえいなければ、鬼道が帝国を離れる事は無かったのだから。

でも。彼らが、絶望の淵にいた自分達を救ってくれた事もまた事実である。彼らがいなければ、きっと自分も源田も闇の底から抜け出せずにいただろう。

――悔しいんだ……このままじゃ。

自分が本当に助かって良かったのか。生きていてもいいのか。実のところはまだ分からない。だが現実には死を免れて此処にいるのであれば、何かやるべき事はある筈なのだ。

――ただ悲劇を見てるだけなんて、絶対嫌だ！

必死になって車椅子を操作する。車輪を回す手が震えて、そのたびに痛みが走るが構わなかった。

「あ……」

角を曲がったところで、人にぶつかりそうになる。

「源田……」

源田だった。ふらふらと、壁に手をつきながら歩いている。彼は脚には大した怪我をしていなかった為、歩けるようになるまでが早かったのだ。無論、長い距離には支障が出るが。

「なんだ、佐久間もか。考える事は同じだな」

顔色は悪いながらも、気丈に笑う源田。

「あの魔女を、探してるんだろう？」

肯く佐久間。思い出すのは、自分達が奇跡的に意識を取り戻し、生きる覚悟を決めたあの日のこと。

お見舞いに来てくれた辺見達が帰った後だ。その女性は現れた。音もなく気配もなく、まるで空気から滲み出たかのように唐突に。長い銀髪は、まるで角のように固められている。ややキツイ印象を与えるものの、それはメイクのせいだと分かった。綺麗な赤い眼の奥、冷たさの向こうに確かな温かさが見えた。

長身の、とてもとても美しい女性。思わず見惚れずにはいられないほどの。

だけど。それでも警戒せずには居られなかったのは、彼女がアルネシアを連想させる真っ赤なドレスを身に纏っていたことと。そのあまりに超自然的登場の仕方が、その正体を容易く予測させたからだ。

『ま…魔女…！？』

アルルネシアや聖也「キークスと同じ、異世界を渡り魔を操る女。正直、お世辞にも良いイメージは無かった。警戒するのが当然だろう。

ましてや、こちらはベッドから起き上がる事もままならない重傷患者。無防備に等しい。強大な魔女に対する有効な防衛手段などある筈もない。

『佐久間次郎に、源田幸次郎…ですね』

警戒心を露わにする佐久間達に、女が口を開く。思いの外物腰の柔らかい声と喋り方だった。

『初めまして。私は、時間の魔女アルティミシアと申します』

『アルティ、ミシア？』

『かつての弟子が、大変な事をしてしまいましたね』

アルティミシア。アルルネシアとよく似た名前。それは、彼女がアルルネシアの師である事に関係しているのだろうか。

だがそんな些細な疑問は、次の瞬間には吹っ飛んでいた。目の前の魔女が、深々と頭を下げてきたからだ。

『申し訳ありませんでした…！』

驚いた、どころではなく。ぎょっとさせられた。

まさか魔女に謝罪を受ける日が来るなんて思ってもみなかったか

ら。

『謝って赦される事でもなければ、私が謝って償いになるとも思いません。でも私が、私をもっと早く彼女を止めていれば、こんな事にはならなかった……!!』

泣きそうな声だった。佐久間は慌てて彼女を宥めてしまった。事情があまりに飲み込めてないのもあるし、女性に泣かれるのは男として辛いもある。

何より。あくまで事をしでかしたのはアルルネシアだ。鬼道を殺したのも佐久間と源田を洗脳したのも、影山や不動を唆したのも全部。犯人でもない人間に謝られたって、正直困る。

ややバタバタしながらも、アルティミシアから大まかな事情は聞き出した。アルルネシアはかつてアルティミシアに憧れ、押し掛け弟子のようについて回っていたこと。ある時思想の違いから決別し、袂を分かったこと。

そして。その後からアルルネシアの暴走が始まり、次々あらゆる世界に災厄を撒き散らし始めたことも。

『私もまたいろいろ前科のある身ゆえ……今はその償いを兼ねて、聖也の元である事をしています』

『聖也って……雷門の桜美聖也?』

『ええ』

どうやらこの女性は、聖也の仲間であるらしい。アルルネシアの謝罪をしてきた事からしても、とりあえずは敵でない事は分かる。

『様々な異世界の監視と治安維持。……主にアルルネシアのような、犯罪者を取り締まるのを仕事にしているのです。異世界を渡る魔女を捕らえられるのは、同じ力を持つ者だけですから』

その上で、貴方達にお願いがあつて来ました、と。アルティミシ

アは静かに告げたのだった。

『私達と共に…アルルネシアを倒して欲しいのです』

そう。

アルティミシアは。アルルネシアを倒す為に、佐久間と源田に協力を要請してきたのだ。自分と契約を交わし、魔女に抗する為の力をつけて欲しい、と。

最初はとても信じられなかった。自分も源田も、どうにか意識を取り戻したとはいえベッドから起き上がれもしない重傷者。そうでなくとも魔女相手に何の特別な力も持たない、一般人に他ならない役に立てるとは、到底思えなかった。

そもそも、自分達はあまりに大きな罪を犯して此処にいる。何もかも自分の意志で無いとはいえ、一時はアルルネシアの計画に手を貸したと言っても過言ではない。そんな自分達をどうして信用できるのか。

混乱する佐久間に、アルティミシアは言った。

『魔法とは…願いの力なのです。素質ある者が強く願いさえすれば、それ以上の脅威は無いわ』

佐久間は目を見開く。

魔法の素質がある？自分と源田に？

『貴方達は強く願っている。本当の強さを得たいと…護る為の力が欲しいと。そして亡き人の意志に報いる方法を捜している…違いますか？』

違わない。

本心を言い当てられ、黙るしかない。

『まだまだ、悲劇は続くでしょう。この先に待つ絶望がどんなモノかなんて想像もつかないこと。その上魔女との契約の代償は軽くない』

その上で私は此処に来たのです、とアルティミシアは告げる。

『前に進む覚悟がありなら。私と、私達と契約を』

佐久間は僅かに逡巡した。魔女の力の恐ろしさは身に沁みている。安易にその域に手を出すべきでない事も分かっている。

だが。否、だからこそ。

これこそが、自分が生かされた意味ではないか――架せられた役目ではないかと。そうも、思ったのだ。

佐久間と源田は、共に差し出された手を取った。魔女に対抗出来る存在に――魔術師の力を得る為に。

「魔法つて、凄いんだな」

手を握ったり開いたり。その感触を確かめながら、佐久間は言う。

「致命傷だったし、普通なら助かってもし生寝たきりになるような怪我だったんだぜ？それがこんなスピードで回復するなんて」

アルティミシアと交わした契約は以下の通り。

まず佐久間と源田に必要なのは、悲惨極まりないこの怪我を一刻も早く治す事だ。ゆえに、アルティミシアの力で二人の“時間”を早め、驚異的な早さで回復するよう魔法をかけて貰ったのである。

ただし、この魔法を受けるにあたり幾つかの対価を支払う事になった。

一つ。怪我が完治しない限り、二人は与えられた魔法を自らの力では使えない。

二つ。時間を早める為に、佐久間と源田の本来の寿命が削られる。また、どれくらい削られたかも知る事が出来ない。

三つ。魔法が使えるようになった後は、アルティミシアや聖也が所属する組織 - ラストエデンに従って仕事をこなすこと。

これでもかなり軽い対価であるらしかった。というのも佐久間と源田を魔女と契約させるのは、アルティミシアや聖也の願いでもあったからだ。彼女たちもまた、この契約の為の代償を負っているのだという。

「有り得ない事は有り得ない… なんだよ佐久間」

源田がやや苦い笑みを浮かべる。

「堅苦しく考えても混乱するだけさ。魔法なんかなくて、当たり前のように否定出来てた頃にはもう戻れないんだから」

「…まあな」

今だからこそ分かる。かつての自分達が、どれだけ幸せな場所にいたのかが。

総帥の鳥籠に囚われた世界だった。その為に毎日毎日傷ついていくばかりの人がいて、その人に護られるしか出来ない自分があまりに齒痒くて。

一步踏み出せば崩れ去るような、脆い地盤の上に成り立っていたかもしれない。そこには鬼道だけでなくたくさんの見えない屍が転がっていたかもしれない。だけど。

帝国で。自分達は確かに笑い合っていた。鬼道もまた、笑っていた。一人じゃないと、共に支え合える仲間がいると知っていて。それは紛れもなく“幸せ”と呼ばれた日々だった。

平凡な平穩。静かな平和が続いて生きて死ぬと、誰もが無意識に、当たり前のように信じていたあの頃。まさかこんな悲劇的な未来や、

魔女のファンタジーバトルに巻き込まれるだなんて誰が予想しただろう？

もう二度と。あんな毎日には戻れない。失ってしまったものがあって、知ってしまった現実がある以上は。

「…時間を負うしかないのは分かってるんだ、でも…何もしないでいるなんて、嫌だ」

佐久間は呻く。

大切な友達がエイリア学園の人間で。しかも酷く傷ついて追い詰められているのを目の当たりにして。

さらにはずっと共に戦ってきた親友の…風丸の、死。円堂の心中は察するに余りあるものだった。

今の彼らに立ち上がれなんて言えない。言わずとも立ち上がれてしまふのもまた彼らであり、故に見ていたたまれないのもまた事実なのだ。

「何か、出来る事が欲しい…どんなに無力だとしても」

「……ああ」

その時だった。階下から、バタバタと駆け上がってくる足音を聞きつけたのは。

「え？」

明らかに焦った様子で階段を昇ってきたのは、佐久間が今まさに捜していた人物だった。

アルティミシアは佐久間と源田の姿を捉えると、驚きを露わにして…言った。

「駄目…ッ…逃げなさい！早く…！」

状況が飲み込めずフリーズする佐久間。逃げる？何から？何処へ？戸惑っている間に状況は変化していく。現れたのは、影だった。真っ黒な影が、突如足元から吹き出して来たのだ。

【4 - 2・祝祭の魔女、降臨】

それは、ウネウネと地面を這い、床を舐めるようにして動き回る。時に絡み合い、時に溶け合う、まるで液体のような黒。

「何だこれは…！？」

源田は呆然とその光景を眺めていた。無意識に、車椅子でろくに動けない状態の佐久間の傍に寄る。

本能で理解していた。この“影”は…とても良くないモノ。本来この世界にあつてはならないモノだと。

自分以上に佐久間は重傷なのだ。自分に何が出来るか分からないにせよ、彼だけは庇わなければ…その心理だけが働いていた。本能的な恐怖に抗うように。

「ハートレス、です」

「ハートレス？」

「ええ」

床を這う影達を見ながら、アルティミシアが言う。その顔は若干青ざめているように見える。

「簡単に言えば、人の心を食らう魔物。心なきもの…ハートレスと呼ばれています。襲われた者は死ぬか、廃人になるか、同じ化物になるか…」

「なっ…！？」

そんなにヤバいものなのか。一気に顔から血の気が引く。

「…この世界に…出現した前例はありませんでした。しかし、アルネシアの撒き散らした災厄の影響で、あちこちに歪みが出ているでしょう。これもその、一つ」

彼女が説明している間に、影はゆつくりと床から盛り上がり始めた。ぐねぐね、ぐねぐねとした動きが気色悪い。

しかしその薄気味悪さに反し、やがて成されたその形は愛らしささえあるものだった。丸っこいフォルム。小さな手足に大きな頭。二本の触覚に、金色の丸い瞳。

「シャドウ、と呼ばれる種です。ハートレスの中では最弱の部類に入りますが、襲われた者の末路に変わりはありません」

不意に、シャドウが飛びかかってきた。鋭い爪を振りかざして、真っ直ぐ源田目掛けて。

「くっ！！」

避けたというより、転んだと言った方が正しい。だがそのおかげで、影の餌食になる事は免れた。

ザシュツ、と音がする。ぞつとした。壁が抉れ、大きな爪痕が出来ていたからだ。

ハートレスはみるみる数を増やしている。わらわらと集まってくるそれらに、赤い矢のようなものが次々と突き刺さった。まるで蒸発するように消えるシャドウ。

「…何が理由で今、この場所にこんな大量のハートレスが出現したか分かりませんが…非常に危険です！お二人は早く非難して下さい！！」

どうやらアルティミシアの魔法らしい。彼女の回りに浮かび上がった幾つもの小さな赤い矢が、次々とシャドウ達を一撃の元抹殺していく。しかし、数が多すぎる。これではキリがない。

「避難つて…そんな事言われても…!!」

こつもわらわらと集まってこられては、動くに動けない。佐久間は勿論、源田自身も走れるような状態にないのだから尚更だ。

「く、来るな！」

「佐久間!!」

そうこうしている間に、シャドウの数体が佐久間の車椅子にまわりつき始めた。マズい。アルティミシアが矢で射るも追いつかない。

このままでは…!!

「光よ!!」

凜とした声と共に。真白い光が弾け、一瞬周囲を覆い尽くした。あまりの眩しさに、目を閉じる源田。そして。

「なっ…!!?」

瞼を開いて、仰天する。当然だ。さっきまで廊下を埋め尽くさんばかりにハートレス達がひしめき合っていたというのに…それら全てが、影も形もなく消滅していたのだから。

「なんとか…間に合った…!!」

「…！お前は…！！」

肩で息をしながらも、走ってきた少年。緑色のポニーテール。少女のような顔立ち。そして、雷門のユニフォーム。

「レーゼ…」

どうして彼が此処に。大阪のイプシロンとの戦いで倒れて、聖也の所有する救護施設にかつぎ込まれたと聞いていたが。

「聖也との契約…どうやら、不完全ながら覚醒したようですね」

困惑する源田と佐久間をよそに、アルティミシアは全て分かっているらしかった。レーゼに向けて笑みを浮かべる。

「緑川リユウジ…祝祭の魔女、レーゼ」

魔女？彼が？

源田はつい、まじまじとレーゼを観察してしまう。特徴的なポニーテールや服装に変わりはない。しかし、その両手には不思議な…鍵の形をした双剣が握られている。

「いつまでも寝てられないからな。…本番は、これからなんだ」

レーゼが腕を振ると、剣は光の粒子になって消えてしまった。あの剣は一体何なのだろう。妙に気になった。

「佐久間に源田。円堂達の為に…何か出来る事をしたいと思っっているのは、私も同じだ」

半ば混乱している自分達に、レーゼは話しかけてくる。

「だが、アルティミシアにも説明されただろうが…これ以上お前達の時間を進めるわけにはいかない。どうか…私達に任せてくれないか」

「レーゼ…」

「頼む」

突然レーゼに頭を下げられ、驚く源田。今度は謝罪ではなく、懇願の為だと分かっていたが。

「私も…福岡の試合を、見ている事しか出来なかった」

その言葉にはつとめる。

悲劇を見ているしか出来なかった辛さ。何かしなければという焦り。そういった意味で、自分達は同じだということに。

「連絡は受けている。円堂は今…目も当てられないような状態だそうだ。あれからろくに食事もしていないらしくて」

「…!!」

あの円堂が。源田は佐久間と顔を見合わせる。予想の範疇とはいえ、具体的には想像し難いものがあるのだ。

自分達の知る円堂は。いつもゴールを背にどっしり構えて守り、仲間達が挫けそうな時も気丈に励ましてみせる…そんな男だったから。

「私になら何がどう出来る…なんて自惚れるつもりはないけど。少しは魔法に触れた私だから、出来る事もあるかもしれないって思う」

頼むよ、と。再三言われれば頷くしかなかった。どのみち自分達が今すぐ動けない事には変わりはないのだから、誰かに託すしかない。それに。さつき見せたレーゼの力には驚かされた。あれが魔法、なのだろうか。あれだけの力があるなら…-と思ったのもまた事実だ。

「そうだ、アルティミシア…」

契約について話があるんだが、と。続けようとした源田の言葉は、中途半端に途切れた。

「…源田？」

何かを察したのだろう、佐久間が訝しげに見上げてくる。しかし、今の源田に返事をする余裕など無かった。

「痛っ…うぐっ…！」

「源田!？」

膝を追って、前のめりに倒れる。

お腹が、痛い。

内臓をぐちゃぐちゃとかき回されているかのよう。悲鳴すら声にならないほどの激痛が下肢から突き上げる。吐き気も酷い。口元と腹を押さえて、うずくまる。

何だ。一体何が起きたのだ。

頭まで割れるように痛み出した。意識が急速に遠ざかっていく。幾つもの声が、脳内で反響する。

『逆らうな…私に逆らうな逆らうな逆らうな!…!』

『貴方達は魔女や魔術師の素質は無いみたいだけど…蛹としてなら、どうかしら?』

『痛い…痛い、痛い…やめて、下さ…』

『きゃはハはハハあはア』

どくん、と大きな鼓動。
参ったな、と思う。心臓まで痛くなってきた。

『逢えるまで、もう少し』

誰？逢えるって、何？

「源田！！しっかりしろ！！」

佐久間の声を最後に。源田の意識は、プツツリと途切れたのだった。

「源田が倒れただあ！？」

聖也は思わず大きな声を出してしまい、慌てて周囲を見回した。
陽花戸中の校舎裏。幸い、人気はない。

「…どういう事だよ。確かにあいづらは万全な体調にや程遠いだろうが…。お前の力で、出歩けるくらいは回復させたんだろ？」

『ええ』

携帯の向こう。アルティミシアの声は堅い。

『彼が意識を失ってすぐ、医師を呼んで調べて貰いました。が…原因がまったく分からないそうなんです。痛みはだいぶ引いたとはいえ、まだかなり辛そうですし…熱も出ているのに』

吐き気。腹痛に胸痛に頭痛。さらには発熱。

聖也の頬を冷や汗が伝った。嫌な想像しかできない。なんせその症状は…。

「アルルネシアにやられた…ってか？」

可能性は恐ろしく高い。そもそも、佐久間と源田はアルルネシアに生き返させられた存在。その課程で、どのように身体をいじくり回されていてもおかしくないのだ。

デザムやレーゼがそうだったように。

「…佐久間の方は何ともないんだな？」

『ええ。しかしあくまで“現時点では”の話。今後どうなるかは分かりませんね』

「だらうな」

もし、アルルネシアが佐久間と源田に魔法的な処置を施していたなら。一般的な人間の医学ではどうにもなるまい。CTスキャンにかけてもレントゲンを撮っても何も映りはしない。

そう、彼らがそのまま変死したとしても。

「…もう一度、二人をラストエデンのホームに連れて行ってくれ。手配はしておく」

実は彼らが一命を取り留めた直後、一度ラストエデン所属の医師

にも見せている。魔力を感知できるスキャンや検査も行ったが、その時は何も異常が見あたらなかったので安心していた。

が。もし遅効性の爆発物や毒薬やそれに値するものが仕込まれていたなら。最初は見つからなくても今もう一度検査したら結果は違ってくるかもしれない。

『分かりました。…それで、キーシクス。そちらの状況はどうなっていますか？』

「んー…多分、ミシアが察してる通りよ?」

聖也は苦い笑みを浮かべる。無論、電話ごしのアルティミシアに見える筈もないけれど。

「みんな、精神的にズタズタだぜ。吹雪や宮坂も酷いが…円堂がダントツで悲惨。このままじゃ餓死するか衰弱死するか、だな」

風丸やヒロトの件だけではない。あの後、栗末まで離脱したのがトドメだった。状況を考えれば誰も栗末を責めることなどできないが…円堂が受けたショックの大きさを思うといたたまれない。元より、キャプテンとしての重圧から、誰にも言えないストレスを抱え続けていたに違いないのだ。それが今回の件をきっかけに一気に決壊してしまったのだろう。

「でも…きつとこれは、必要なこと」

どんなに痛くても、辛くても、壁にぶつからなければならぬ。本当の意味で誰もが絶望を知り、思い知るべきだったと知っている。乗り越えて、大切なものを守る為に。

『……先程、レーゼに一時復帰許可を出しました。もう少し慣らす必要はありますが、とりあえず大丈夫な筈です』

少しの沈黙の後、口を開くアルティミシア。

『彼は…風丸に懐いていましたから。本当は辛くて仕方なかった筈です。それでも…自力で、立ち上がってみせた』

そうだな、と聖也は小さく呟く。レーゼの様子はちよくちよく聞いていたから知っている。

あの子は本当に、強い。だからきつと彼なら、今の雷門を救える。彼にしか出来ないことが出来る筈だ。

「…俺も、しゃきつとしねーとな…」

一つ、溜め息をついて電話を切った。自分はもう、泣くわけにはいかない。これ以上卑い涙を流さぬ為、やるべきことをするだけだ。

空はまだ、暗いまま。光の射す気配はない。さながら自分達の心模様を示すかのよう。

【4・3・愛の、彷徨】

何かを考えていた筈だった。しかし、ふとした瞬間に何も考えられなくなる。自分は誰で何処にいて何をして何をするのか。そんな当たり前のことが消失し、真っ白になる。

こんな事初めてだ、と円堂は思った。つまりそれが、生まれてからかつて無いほど余裕を無くしている状態なのだと、どこか冷静に考えていた。

陽花戸中の屋上。座り込み、もたれたフェンスは堅く、冷たい。長時間に渡れば渡るほど背中も尻も痛くなる。しかし、他の場所に移動するという選択肢は初めから無い。

人間が、好きだ。人の声が、人の温もりが好きでたまらない。それは今までもそうだし、これから変わらないだろうと思う。だからずっと無意識に、人の多い場所を選んで生きてきたのかもしれない。誰かと一緒にいるのは楽しくて、毎日新しい発見があったから。

なのに。ああ、本当にこんな事は初めてだ。今だけは、誰の声も聞きたくないし誰の姿も目に入れたくないなんて。

「…我儘だなあ、俺」

誰かにではない。

自分に聞かせる為に、円堂は呟く。

「我儘で自分勝手に…最低だ」

もはや何を悔いればいいのかも分からない。キャプテンとしての無責任さ以前に、人間的な問題として悔いねばならない点が山ほどある気がした。

「何も、見えてなかった」

初めてヒロトに逢った時に、疑問に思うべきことはたくさんあったはずだ。何故あんな真夜中に、まるで忍び込むようにして漫遊寺に来たのか？こっそり抜け出てきた、雷門の事は有名だからよく知ってると彼は言い、自分はそれで納得してしまったけれど。

それだけでは、無かったのだ。自分達といずれ戦う事になる雷門について、偵察にきた。あるいは自分と接触を図りに来た。それが父の命令かヒロトの独断かは分からない。でも円堂の性格を分析したデータがあるなら、高確率で真夜中に特訓している事も容易く想定できた筈だ。

『君達のサッカー、見ていて羨ましいな。どんなに辛い状況でも真剣に楽しんでいるのが分かるもの。俺もサッカーやるけど…君達のように、出来ないから』

身体が弱いから謹慎をくらっていた、というのは嘘ではないかもしれない。ヒロトの病的な肌の白さを思えば。

だから、その次の言葉もあっさり流してしまっていた。雷門のようなサッカーが、出来ない。それは身体が弱いから、それだけが理由だと勝手に決めてしまっていた。

「そうじゃ、無かったんだよな」

空を見上げる円堂。曇ったまま、晴れる気配のない空を。

「羨ましいって…言ってくれてたんだよな。俺達みたいな楽しいサッカーがしたいけど…出来ない境遇だったから」

ヒロトのサッカーは、誰かの為にするサッカーだった。何かを壊し、支配し、従える為の手段だった。本人の望みとは裏腹に。

こんなサッカーはしたくないよ。

君と楽しいサッカーがしたいんだよ、と。

ヒロトはずっと訴えていたのだ。ハッキリと言葉に出せば自分にも仲間にも危害が及ぶ。何より父を放つてはおけない。でも、本当は辛くて辛くて。

彼は円堂にずっと言いたかったのだろう。君なら、俺達を救ってくれるか？と。

彼はずっと叫んでいたのに、自分はまったく気付いていなかった。最後の最後、間に合わなくなってから手を伸ばしたけれど、それでは何の意味もなくて。結局ヒロトは傷ついて追い詰められて、またエイリアに引き戻されてしまった。

「風丸…」

フェンスを握りしめる。グラウンドの向こう、ランニングをする仲間達の姿が見える。掛け合う声が聞こえる。でも、その中に風丸はいない。そう思ったら涙が滲みそうになった。

辛い時。落ち込んだ時。隣にいて話を聞いて欲しい存在が誰か、なんて考えた事も無かった。何故ならその存在はいつも当たり前のように側にいたから。当たり前すぎて、気付けなかった。

甘えていたのだ、自分は。無意識に風丸に依存して、寄りかかって。豪炎寺や他のみんなの事だって信頼している。でも自分にとって一番近い場所にいてくれたのは、いつだって彼で。

「失くしてから気づくんじゃ遅すぎるって…分かったのになあ…」

鬼道が死んだ時否が応にも思い知らされたのに。

また自分は同じ事を繰り返す。

罪を、繰り返す。

「本当に、遅すぎる…」

もう。

風丸は、戻ってこない。

否。戻ってきたとしてもその時風丸は――。

「あはは…」

不意に零れた笑い声は、乾いていた。自分からこんな声が出るなんて、と内心円堂は驚いていたが。

そんな本心とは裏腹に、嗤う声が止む事は無かった。

「あははは、はははは！」

最低だ。

戻ってきた風丸は、もう風丸でないかもしれないのに。

それでも構わないと、思ってしまった。もう一度風丸に会えるなら、もう一度サッカーができるかもしれないなら、と。

ああ、そもそも本当の“風丸一郎太”は、一体どこにあったのだろうか？

「はははっ――！」

あらゆる感情は流れ、溶けて、また消えていく。

誰かの嘆きと、痛みを飲み込んで。

屋上のドアの前。夏未は一人、唇を噛み締めて立ち尽くしていた。

- - あんな円堂君、初めて見た…。

見ているだけで死にたくなる姿、とはあのような様を言うのだろう。泣きたいのに泣けなくて、ただ自らを嘲るように嗤うしかない。

それはどれほどの悲しみだろう。
どれほどの、痛みだろう。

- - 何で来たんだろう、私。

決まっている。あんな円堂の姿は見るに耐えきれなくて - - 少しは元気づけたくてやって来たのだ。

最初にかける言葉も、その先の言葉も決まっていた筈だった。なのに、いざ円堂の姿を目の当たりにしたら - - 足が竦んで、動けなくなってしまった。

自分に何かが出来るなんて自惚れていたわけじゃない。でも、何かは出来るかもしれない、くらいの期待は持っていたのに。

僅かばかりの自信が、足下から消失していく。がらがら、がらがらと崩れる音がある。今の円堂に何を言えればいい？何を伝えればいい？何を口にしたところで届かない結果が見えているようで - - 怖かった。

あまりにも辛くて辛くて。

ああ、誰にもぶつけられそうにない。こんな、面倒な感情など。

「夏末さん？」

はつとして顔を上げる。階段を登ってきたのは、秋だった。彼女もまた、夏末と同じ目的で来たのだろう。

「やっぱり、考える事は同じだね」

秋は力無く笑う。円堂ほどでないにせよ、その顔には憔悴した色が見える。きっと自分も似たような顔をしているのだろう。

「…見たくなかったわ。あんな円堂君の姿なんて」

自然と。夏末の口からは本音が零れていた。自分と同じように、円堂に好意を寄せる彼女となら。この想いも共有出来ると、そう思ったのかもしれない。

「今の円堂君は…円堂君じゃない…!!」

ぎり、と唇を噛み締める。

自分の知る円堂は。自分の大好きな円堂守という人間は、いつも明るいみんなのキャプテンだった。どんな夜も、彼さえいれば明けると信じていられた。朝を教えてくれる、太陽そのものだった。

なのに今の彼は。沈みこんだまま、泥沼に溺れるばかり。そこから動く気配もない。悩みこんで立ち止まったって、解決しないのに。

「……夏末さん」

静かに、秋が口を開く。夏末は慌てて顔を上げた。そうせざるおえないほど秋の声は、重たい感情に満ちていた。

「否定するの？今の円堂君を」

「…え」

「もし、そうなら」

秋の顔は真剣というより無表情に近かった。だから、分かった。彼女は今、怒っている。夏末の何かが彼女の琴線に触れたのだ。

「逃げてるのは夏末さん、貴女よ」

がつん、と。脳髓に、衝撃。

「弱さを持たない人間なんかいない。一生に一度も逃げた事のない人間なんかいない」

淡々と、秋は言葉を紡ぐ。夏末は目を逸らす事も耳を塞ぐ事も出ず、凍りつくばかり。

「円堂君は、確かに強いよ。でも、だからこそ脆いの。夏末さんは、気付いてなかった？」

気付いてなかったわけじゃ、ない。しかし夏末は何も返事をする事が出来なかった。

強くて強くて、いつもその求心力でみんなを引っ張る円堂。だからいつかポツキリ折れてしまうのではと、不安に思っていたのは事実だ。

だけど。

そんな日が来るかもしれないなんて、認めたくなくて。そんな日が来て、気持ち揺らいでしまうのが怖くて。

何も出来ない自分を思い知らされたらと――恐ろしくて。

「円堂君は、綺麗な幻じゃないよ。生きている、生身の人間。私達が理想を押し付けて強制するなんてお門違い」

「そんな、つもりじゃ…」

「キツイ事を言ってるのは分かってる。でも、聴いて」
秋はじつと夏未を見つめる。大きな瞳に映る自分は――怯えと、焦りに満ちていり。

「強さとか、カッコよさだけ求めて…本当の姿を否定して、受け入れられないなら」

くるり、と秋は背を向ける。

「貴女に、円堂君を好きでいる資格は、無いよ」

タン、タン、タン、と階段を降りていく足音。夏未は去っていく秋の背中を、ただ見送るしか出来なかった。

何か言うべきだったのかもしれない。そんな事ない、と反論するべきだったのかもしれない。
だけど、それが出来なかったのは。

「私、は…」

かくん、と折れる膝。

「私は……っ！」

秋は何一つ、間違った事を言っていない。逃げていたのは紛れもなく自分の方で、それを初めて他人に言葉にしてぶつけられたと分かったから。

円堂が大好きだ。愛してる。そういう意味で大好きだ。

こんな感情は生まれて初めてだった。誰かの為に、自分の全てを投げ売っても力になりたい――なんて。だからマネージャーになった。大嫌いだった雑用も進んでやるようになった。

全部全部全部、円堂の為だ。円堂を大好きな、自分の自己満足の為とわかっていた。だけど、一度彼の世界に足を踏み入れてしまえばもう止まらなくて。

どこかの安い恋愛小説のようだけど、本気で思ったのだ。こんな燃えるような恋は、百年に一度の代物だと。

「う、うっ…」

嗚咽し、うずくまる夏未。

自分は、太陽のような円堂の姿に魅了された羽虫のようなもの。だから消えそうになる光に焦って、もう一度光を灯そうと躍りになったのかもしれない。

それは完全に自分本意なこと。秋に非難されても仕方ない。彼女は自分よりずっと円堂を理解し、ずっと近い場所にいるのだ。

ただでさえその愛らしさも家庭的で優しい性格も魅力的だというのに。気持ちまで負けて、ああ本当に彼女に勝てる気がしない。

本当に自分は酷い女だ。大好きな人が傷ついていても、自分の傷しか考えられない。

資格なんてない。本当に、そう。

「それでも…」

愛はさ迷う。

膝の上に降る涙の雨と共に。

「それでも私は…円堂君が好きなの…！好きで好きでたまらないのよ…！！」

まだ、青空は見えない。

【4・4・哀の、芳香】

階段を駆け下りる足は、どんどん早くなる。暗い踊り場を抜け四階へ。そしてさらに何かから逃げるように三階へと。

- 夏末さんに…酷い事言っちゃった。

秋の頬を、ぼろぼろと涙が伝う。

- 私だって…円堂君の為に何一つ、してあげられないのに。

夏末がどれほど円堂に恋い焦がれているか知っている。その思いがどれだけ真摯で、切実なものであるのかも。

だからこそ、言わなければならなかった。自分が本気で好きになった人を、あれだけ愛してくれている彼女だからこそ。目を逸らさないで。円堂のありのままを受け止めて、と。

- でも、分かっているの。それは本当はととても辛い事だって。

誰だって、恋した相手の一番好きな姿がある。好きであればあるほど、その姿を長く置きとどめておきたくなる。そうではない姿を見て、失望してしまうのが恐ろしくなる。

自分とて例外ではないのだ。ただ秋は、己の醜さを熟知していた。その上で円堂の全てを受け入れる覚悟を決めた。本当の愛は、その先にこそあるものと知っていたから。

- だからこそ…本当は、円堂君をあのままにさせちゃいけないのも分かっている。

ただぶつかり、諭す事が優しさではない。時としてその行為は、容易く押し付けへと変わるからだ。静かに、傍で待つのも必要な事だと知っている。

でも。あの姿は円堂自身すら本当に望んだ姿じゃない。そして何より、あのままでは衰弱死すらあり得るのだ。

何かをしたいと思って逢いに行つたけれど。夏未に逢つた事で、結局本人には逢わずに引き返してきてしまった。いや、もしかしたら夏末がいなくても、自分は円堂に逢わなかったかもしれない。心が折れかけているのは、円堂だけじゃない。

「秋」

不意に名前を呼ばれ、顔を上げる。いつの間にか自分は二階の廊下まで降りてきていたらしかった。

一之瀬が、小さく笑みを浮かべてこちらを見ている。

「円堂には、逢えた？」

さすが幼なじみと言つべきか。すっかりお見通らしい。秋は無理矢理笑顔を作る。

「うっん。…引き返してきちゃった。夏未さんもいたし」

嘘では、ない。ただその夏末も結局、円堂には逢わなかった。ただろ
うというだけで。

「秋…いいよ」

「え？」

「うまく、言えないんだけどさ」

一之瀬は頭を掻いて言う。それは昔から、一之瀬が何かに困った
り煮え詰まった時の癖と知っていた。

「無理して、笑わなくていいよ」

一瞬。声を亡くす、秋。

「辛いのは自分だけじゃないから、とか。みんな辛いんだから頑張らなきゃとか思ってるんだらうけど。…俺や土門の前でくらい、楽にしていればいいじゃん」

ね、と笑う一之瀬。彼だって辛い筈だった。なのに、自分のことをこんなに気遣ってくれる。優しくしてくれる。

だから。だから、自分は。

「…相変わらずだなあ」

思い出す、その感情。実のところ今でさえ完全に失ったわけじゃない、鮮やかな色。

「一之瀬君、変わらないね。優しいとこ、変わってない」

秋は、目を閉じて。一つ大きく息を吐いた。

深呼吸して、大好きな人…それが恋人でも家族でも友達でもいい…の笑った顔を思い出す。そうすると、気持ちがすつと溶けて軽くなる。かつて一之瀬が教えてくれたおまじないだった。

今考えたのは円堂の顔ではなかった。

小さい頃いつも隣にあった…一之瀬の、笑顔だった。

「私も…もっと優しい人間になれたらなあ…」

小さな呟きを拾われたのか、一之瀬が僅かに眉を顰める。多分彼

は、秋は優しい子だよ、と言ってくれる。そうじゃないと知っているのは秋自身だけだ。

自分ほど残酷で身勝手なエゴイストはいまい。なんせ、何一つとっても己のことしか考えていないのだから。

「優しく、なりたくない」

優しく。そしてもっと、強い子になりたい。

「そうしたら、もっと誰かの為に、何かができたのに」

悔いているのは円堂に対してではなかった。

風丸に対してもそう。

ヒロトに対してもそう。

雷門の仲間達みんなに対してもそう。

自分はいつだって、無力だ。

「秋は、悔いてるんでしょ？」

ぽん、と温かな手が肩に置かれる。見つめた先、穏やかな一之瀬の瞳があった。

「悔いて、誰かの為になんとかしなきゃって思うキモチ。それがあ
る人間が強くて、優しいってことだと俺は思うよ。だから……」

少しだけ。優しい一之瀬の瞳が、辛そうに伏せられる。

「大丈夫。秋はもう、とつくに“優しい子”になれてる。少なくとも、悔いる事すら諦めかけてる俺なんかよりは」

「一之瀬君……」

なんだか、既視感を覚えて、つい自然に笑ってしまった。

「え、秋？」

「ふふっ…いいの、何でもない」

ちよつと申し訳ないと思う。一之瀬だって真剣に悩んでると分かっている。でも、彼の言葉で安堵してしまった自分がいるのも確かなのだ。

自分より誰かの方がずっと凄い。だからなんとか足手まといから脱却しなければ、と。そんな焦燥と無力感を抱えていたのは自分だけではなかった。一之瀬もまったく同じ事を考えていたなんて。

いや、多分。一之瀬だけではなくて。

「…ね、一之瀬君。今更なんだけど、ね」

秋がその話をしようと思ったのはきつと。これ以上、後悔しなくなかったからなのだろう。

「私の初恋の人、一之瀬君なの」

今日伝えなくても明日伝えればいい、なんて。もうそんな浅はかな事は思わない。今日と同じ明日など絶対に来ない。無限に続く幸福なんてない。

だから言つべき時を、誤らない。

「私…“私”が一之瀬君を好きになった理由が今、すごくよく分かる」

カッコイイから、だけじゃなかった。

優しいから、だけでもなかった。

一之瀬一哉はフェニックスだ。何度燃え尽きても翼が折れても、諦めずに空へ挑み続ける。舞い上がり続ける。その心の美しさに、自分は惹かれたのだ。

多分リ力は、そんな一之瀬の持つ“強さ”を、直感的に見抜いたのだろう。

「だけど…私じゃ、一之瀬君を幸せにしてあげられない。だって私達、似すぎてるんだもの」

「……そうかもね」

一之瀬は否定しなかった。彼も薄々気付いていたんじゃないだろうか。秋と一之瀬の組み合わせでは、何かを変える事は難しい、とだけ。だからこそできる事もあるのだろう、と。

「…それに。一之瀬君の一番は、私にはならないから」

ぎゅっと、一之瀬に抱きつく。深い意味があるようで、何の意味もない行為だった。未来に進む儀式でありながら、過去を断ち切るには至らない行いだった。

一之瀬がまだリ力に対して、恋愛感情を抱くレベルにないことは分かる。でも、彼を幸せにできるとしたら、それは彼女以外には有り得ない。一之瀬は、本当の意味でもう、秋を見ていないから。

自分が今、一之瀬を一番に見ていないように。

「…秋」

小さく息を吐く一之瀬の顔は見えない。でもその声は、穏やかだった。

「ありがとう」

何に対しての“ありがとう”だろう。もしかしたら一之瀬自身に
もうまく説明出来ないのかもしれないけれど。

「きつと大丈夫だよ、秋」

そつと身体を離し、見つめ合う互いの顔は、どこか晴れやかだった。

「出来る事は、必ずある」

秋も、今度ははっきり頷く事が出来た。

こんな不器用でエゴイストな自分達だけど、愛する事の意味を誰より理解できているから。

きつと、なんとかなる。

考えればいい。自分なりの方法で、救う未来を。

「うーん…」

階段の影。壁にもたれかかって、リカは意識して独り言を言う。わざと言葉にした。しなれば、挫けそうだったから。

「デバガメする気やなかったんやけどなあ…ホンマにタイミング、悪すぎるわ」

もう二階の廊下には、誰もいない。一之瀬と秋は既に立ち去った後だ。だからリカが何を呟こうと、それを彼らに拾われることはない。

「かなわんなあ…」

二人の話の全てを聴いていたわけではなかった。むしろ内容的には殆ど聴いちゃいない。でも、リカはそれを見てしまった。二人が抱き合っているところを。秋に優しい言葉をかける一之瀬を。

なんとなく予想していたことだ。一之瀬と秋が幼なじみだと知ってから。秋を見る一之瀬の眼が、どこか慈しみに満ちていると気付いてから。

それでも――これはほぼフラレ女王の直感というヤツだったが――彼らの間には不思議な壁があつて、恋人同士の間柄でないことは分かつていたから。自分にもまだまだチャンスはあると、樂觀視していたのだけど。

「ダーリン…無理して笑つとつた」

恐ろしく演技上手な彼だけど。辛い辛いと叫ぶ心を押し殺して、笑っていた。

それが自分の役目だと云うように。

「でも、擦り切れて擦り切れてどうしようもなくなった時…一番に頼れる存在は、ウチやなかった」

一之瀬が本当の意味で秋を好きかどうかは分からない。恋心ではなく、それは一番近い異性の親友という意味なのかもしれない。それは秋の側にも言えることだ。彼女が恋愛的に一番好きでいる存在が円堂であることは明白だから。

そう。この気持ちは嫉妬より、己に対する失望だ。秋と一之瀬が恋仲であるか否かが問題なのではない。一之瀬が頼りたい仲間が自分でなかった事がショックだったのだ。

「涙が、出るわ」

確かに自分は秋に比べ、あまりにも一之瀬との付き合いが浅い。時間も長いとは言えない。まだまだ自分が一方的に彼にへばりついている段階だと分かっている。

でも彼は自分の雷門入りを認めてくれた。仲間として迎えてくれた。だから・・・少し、ほんの少しだけ自惚れていた事是否定出来ない。

一之瀬のすぐ近くに赦されるようになったなんて、まったく夢を見過ぎてる。

「こんなに、こんなに・・・好きなのに」

愛するだけじゃ。護りたいと願うだけじゃ駄目なのか。まだまだ足りないものが多すぎる。焦りばかりが募る。自分達の時間は無限ではないのに。

「・・・何してんの、リカ」

「・・・小鳥遊」

たまたま一階から登ってきた小鳥遊に、怪訝な顔をされた。

「ブツブツ独り言喋っちゃって。気持ち悪いんだけど？」

あまりにハッキリ言ってくれるもんだから・・・ついつい噴き出してしまった。隠し立てせず、ズケズケものを言ってくる彼女の気質が、嫌いではなかった。

気を使わなくて楽でいい。もしかしたらリカが今一番素直に接する事が出来る相手かもしれない。

「いや、な」

そういえば、と思う。

そういえば小鳥遊にもいたのだっけ。気になって気になって……
本人は認めやしないだろうが……護りたくてしょうがない、そんな男の子が。

「恋って幸せやけど、なかなかめんどくさいな……って話」

何ソレ、という顔をする小鳥遊に。リ力は、さっきまでのことを話してみる。

ぐだぐだ悩むのは性に合わない。
考えるのは、動いてからでいい。

【4・5・ロスト、スマイル】

心も身体も、酷く冷え切っている。少し前まで荒ぶっていた激情が嘘のようだ。

研究所の冷たい廊下を、ウルビダは一人歩く。考える事もしなければならぬ事も山ほどあった。今、その一つを成す為、ある場所に向かっている。

自分達が敬愛する父――その人の元へ。

――あいつ……風丸一郎太、といったか。

自分のそれより淡い青色の、長い髪。綺麗な少年だった。それは多分見た目だけではない。きつと心まで透き通った存在だったのだろう。

汚れを知らない、のではない。何度その胸の内を濁らせても、また晴らす事の出来る強さ。それを人は、真の美しさと呼ぶのだろう。

――何も、知らないくせに。

『……終わりを、望んでたんだ……グランは』

――本当の地獄なんて、見た事もないくせに。

『終わらせたい、と。全ての悲しい事を。悪い夢を』

――ほんの少し……あいつの本音に触れただけで、知ったようなクチをききやがって。

『お前だって……本当は同じだったんじゃないのか。本当は心のどこ

かで…期待、してたんじゃないのかよ』

- - お前達に何が分かるというんだ。

『俺達は無力かもしれない。…でも、お前達に手を差し出すことくらいなら出来るんだ』

- - 期待させるな。望みなど持ったところで…虚しいだけなんだ。

『待つてるだけじゃなくて…お前から動いてみたっていいじゃないか』

- - これ以上、グランを追い詰めるな。傷つけるな。これ以上…。

『考えるよ。何もしないで諦めるなよ！あんたやグランや…あんた達の愛する人が本当に幸せになれる未来を。みんなで幸せになる方法を…！』

- - 無為な言葉で、私達を揺さぶるな…！！

ダン、と思わず壁を殴っていた。拳から伝わる振動。痛み。それらと共に、頭に響いてやまなかった風丸の声も霧散していく。

静かで重たい怒り。そこに僅かに混じる悲しみに、ウルビダは必死で眼を背けようとする。悲しくなんかない。悲しんだところで、現実は何一つ変わりはないのだ。

- - 殺して、しまった。

無知のくせに知ったかぶる風丸に対し、憤りがあったのは事実だ。しかし、彼が自分達にはない強さを持った、本当の意味で“美しい

”存在であつたことは間違いない。
罪悪感。

確かに潰すつもりではあつたけれど――殺すつもりなんて、無かつたのに。

殺されていい人間でも、無かつたのに。

――私が、殺した。

愛する父の命なら。父の為ならば、どんな事でもすると誓つた。死すら厭わず、この手を汚す事も躊躇わないと思つていた。なのに、いざその時がきて――今になってこんなにも恐怖を感じるなんて、自分のこの手は、この力はいとも容易く人の命を奪えてしまう。その事実が――こんなにも。

「ふふ……あはは……」

零れたのは涙では無かつた。

嘲りと諦めに満ちた――嗤いだつた。

「殺した！私が――！私は人殺しになつた――！」

殺意は無かつた。だからあれは悲しい事故だつたんだと、誰かはそう言うかもしれない。

でも誰より、ウルビダ自身がよく分かっている。殺す気は無かつたとしても、壊す気はあつたのだ。害意を持って風丸にボールをぶつけた。サッカーボールを凶器にしてみせた。

ならば、何も変わる事はない。殺人が傷害致死かの違いだけ。自分が彼を殺し、自分に彼が殺された事実にはなんら変わりはないのだ。

[illegible]

あの魔女が風丸を生き返らせたとしても。過去は消えない。犯された罪という名のステイグマは一生関わった者の胸に刻まれるだろう。

これで完全に逃げ道は封じられた。

自分は今もう、何処にも戻れない。

幸せだった頃には、還れない。

「ふふふ…無様だろう？笑いたかったら笑っていいぞ、バーン」

「ウルビダ」

途中からその気配に気付いていた。廊下の向こうから現れたバーンは歩くのも辛そうにふらついている。どうやらまだ、アルルネシアにやられた傷が癒えてないらしい。

「……グランのヤツ、どうしてゐる？」

バーンは彼らしからぬ無表情で、ウルビダの問いとはまったく別の事を言った。予想の範疇だったのでこちらも特に憤りはない。

不器用だが、優しい男だ。昔から変わっていない。

「グランか？まだ目を覚ます気配がないぞ。怪我も治ってなかった上、ここ最近眠ってなかったみたいだからな。疲れが出たんだろうよ」

「よく見てんだな、あいつのこと」

「それでも一応グランの副官だ。見くびって貰っちゃ困る」

円堂の仲間を傷つけること、ひいては円堂を傷つけること。もはや限界を突破しているグランの心が耐えきれるとは到底思えなかった。

だから、結末を見る前に。彼の精神が完全に崩壊してしまう前に――フィールドから退場させた。何より、風丸の手をとってしまえ

ば、どんな目に遭わされるか分かったものじゃない。

「あいつは、優しすぎる。とんだ甘ちゃんだ。本当はジェネシスのキャプテンなんかやる器じゃない」

それが希望だなんて、錯覚してはいけない。

その先に待つのは今よりもさらに深い、奈落のような絶望でしかないのだから。

「本当の意味で……どうせ円堂守の事もお父様の事も裏切れやしないんだ。いずれ引き裂けて、壊れる時が来る。……私がやった事など、それを僅かに遅らせる為の……焼け石に水でしかないとしても」

それでも、何かせずにはいらなかった。

ウルビダは唇を噛み締める。

だって――自分は。

「お前さ。前に言ってたよな。グランの事が大嫌いだって」

バーンが口を開く。苦笑しながら。

「ぶっちゃけな。俺もあいつが大ツキライだ。……でもそれにしたって俺もお前も、言ってる事とやってる事が矛盾するだろ」

「……何が言いたい？」

「やっと答えが出たってハナシ」

分かってるくせに、と笑うバーン。

「俺達が嫌いなのは“今”のグランだ。そうだろう？」

ウルビダは何も答えない。否、答える事が出来なかった。
しかしその沈黙こそ、答えに他ならなかった。

「…お前がグランの副官で、良かったよ」

俯き、少しだけ切なさを滲ませた声で、バーンは言う。

「今。…ガゼルも俺もこんなザマだ。俺達も俺達なりに運命ってヤツに抗ってみる気ではあるけど…でも結局、ジエネシスじゃない俺達に出来る事なんてたかが知れてる。あの人を揺さぶれる人間がいるならそれはグランで…グランの率いるガイアでしかありえないんだろっ」

自分には、出来ない。それは負けず嫌いな彼が初めて口に出した敗北宣言であり。

それだけに、痛いほどの想いがこめられていた。それでも愛するひとを救いたい - そんな願いが。

「だからウルビダ。お前、最後の最後まで…あいつの傍にいてやってくれよ」

顔を上げるバーン、その金色の瞳には、ウルビダが初めて見る色が宿っていた。そう、ライバルであり仲間でもある存在への慈しみ、という。

「何があっても、あいつの味方でいてやってくれ。お父様を救えるのがグランだけであるように…あいつを救えるのもまた、お前だけだと俺は思う」

だつてさ、と彼は小さく笑みを浮かべる。

「誰より願ってたんだろ？お前の一番好きなアイツを、もう一度取り

戻したいんだって」

ウルビダが何かを言う暇は与えられなかった。バーンはそのまま手をひらひらと振って歩き去ってしまったから。

その歩くスピードはお世辞にも早いとは言えない。だから呼び止めて否定を投げるくらい簡単だった筈なのに――結局自分は何もする事が出来なかった。

否定するにはあまりに、彼の言葉が的を射ていたから。

「……変なところばかり、目敏くなりやがって」

言われずとも分かっている。

自分がこんなにも、グランを想って必死になってしまう理由なんて。簡単な計算式より容易く解は出るのだ。ただ今まで認められずにいただけ。

何も変わらないのに、結局、何かは変わっていく。

「仕方ないだろ。……気持ち、なんて」

呟きを漏らし、歩を進める。父の部屋は研究所の奥の奥に、ある。

リカの話聞いて、小鳥遊から最初に漏れたのは溜め息だった。それは面倒くさい、呆れた、という意味を含んだものであったが――リカに対してそう思ったわけではなかった。

本当に――恋愛やら独占欲やらといったものは、なんて厄介なのか。今回の場合リカの気持ちは必ずしも恋愛に付随するものではなかったが――独占欲が発生するのは何も恋愛対象に限った事ではないのである。

「要するに」

小鳥遊は呆れを隠しもせず、リカの言葉を要約した。

「一之瀬が一番頼りたい相手が自分じゃなかったのが悔しくて、そんな相手になれなかった自分が不甲斐なくて仕方ないワケね」

「……うん」

「あのねえ……仕方ないでしょ、そんなのは」

髪を掻き上げて小鳥遊は言う。

「あたしに言えた事じゃないけどさ……あんと秋じゃ、一之瀬と一緒にいた時間の長さが決定的に違うの。長く親しんだ相手を頼りにするのは普通の事でしょが」

一之瀬が、リカをまだ恋愛対象として見ていないのは分かっていたし。ついでに、秋をどこか特別な存在と見ていた事も勘づいていた。ただそれは恋をする異性というより、護るべき聖域といった印象ではあったけど。

少なくとも秋が一之瀬にとって、土門に並ぶ親友レベルの相手である事は間違いないのだ。そしてライバルでもある同性の相手には話しづらい事も、異性の秋には相談できるかもしれない。ならばその関係に、何の不自然があるだろう？

対し、リカと一之瀬はまだ知り合ったばかりだ。リカはもう一之瀬にベタ惚れかもしれないが、一之瀬にとってはまだ大事な仲間の一人に過ぎないだろう。

「……あんな。うちだって理解しとんねん。でも感情が……追いつかな

「い事だつてあるやろ」

「まあ…ねえ」

体を丸め、幼子のように体育座りをするリカ。そうしていると大人びた容姿の彼女も小学生のようだ。

「…あたしは。ずっと力つてものを、誤解していた」

自然に、小鳥遊は自分の想いを口にしていた。多分いつの間にか自分も雷門に感化されてきたせいだろう。

「ハデな例を上げるなら…そう、GKを体ごとぶっ飛ばすようなシュートを打つパワーとか。…そういうのが力だと思つてた。そういう力を持つ人間が“強い”んだって」

結局、自分も佐久間達と変わらない。力を誤解して、真帝国に集つた一人。

「でも。…違つたんだね。アンタ達と一緒にいてさ、あたしも段々分かつてきたんだ。本当の力は…強さは、心に宿るって」

「心…か」

リカは力なく笑う。

「確かに…そういう意味でも、うちはまだまだ秋に勝てんのかもなあ」

「そういう事よ」

何も心配する事はない。

願う心は、強い。願えば願うほど、可能性は限り無く高まる。それがこの、世界。円堂達が自分に教えてくれたもの。

だから自分も、願うのだ。小鳥遊は小さく笑みを浮かべた。

【4・6・最期の、意志】

父の部屋の前に立つ。ノックをしようと手を上げて、そこでウルビダは動きを止めていた。

敬愛する父。大好きな父。逢えるだけでいつも嬉しくて仕方なかった存在。なのに。

どうして自分は今、こんなに緊張しているのだろう。何も難しいことはない。ちょっとした提案をしに來ただけなのに。 - どうして

「旦那様なら、今はいらっしやいませんよ」

完全な不意打ち。びっくり、と情けなくも肩が震えた。振り向いた先にいたのは、父の腹心ともいふべき男。

父の秘書官にして、強化人間開発プロジェクト総責任者 - 研崎竜一。

「少々、遠出なさってます。おそらく今日は遅いお戻りになるかと。何かご用件があるなら、私からお伝えしておきますが？」

淡々とした口調。ウルビダはじつ、とその男を見る。

こけた頬に、長身瘦躯。いつも感情を表に出さず、何を考えているかイマイチ読み取れない人物。しかし、二ノ宮が現れるよりずっと前から父に仕えている人間でもある。

意外かもしれないが、ウルビダはこの男に対してそう悪い印象を抱いていない。

まだエイリア学園がお日様園だった頃からそこにいて、父の信頼が厚かったのもあるし。ことあるごとにその能力の高さが伺い知れるものもある。あとは、父が不在の時、小さな子供達の子守役をやっているのを見てきたからでもある。

だが。結局のところ、彼がどんな人物かを窺い知るには至らないのである。魔女の勢力に脅かされる今、彼が自分達にとって敵か味方かも分らない。

学園内では信頼できる大人がいない。残念ながら今はそれが現状だった。

「…貴女のご用件に、目星はついています」

黙ったままのウルビダに、察するものがあつたのだろう。溜め息を一つついて、研崎は言う。

「グラン様が落ち着くまで…貴女がジェネシスのキャプテン代理を務めたい、と。そんなところじゃありませんか？」

つい、まじまじと研崎を見てしまった。それは彼の言つた事が自分にとつて、まったくの凶星だったからに他ならない。

「分かりますよ、それくらい。…グラン様は、繊細すぎますから。円堂守に近づきすぎた時点で、いずれこうなる事は目に見えていました。彼を本当は一番大切にしている貴女が、その重荷を背負うと言ひ出す事も」

「べ、別に私は…」

「昔から、でしょうか？甘くみないで下さいね。何年貴女方を見てきたとお思いで？」

「う…」

小さく笑みを浮かべる研崎。なんだか、何を言つても勝てる気がしない。ましてや彼の言っている事が全体的を射ているとなれば。

「旦那様は、グラン様以外に、ジェネシスのキャプテンを任せる気はないでしょう。全ては最初から決まっていたことです」

ですが、と研崎は続ける。

「一時的な代理というなら話は別です。ましてやそれが、グラン様を想つての事ならば」

許可は出る、と。研崎はそう考えているのか。でも、父は。

「私は…私達は、お父様を愛している。この世の誰より、愛している。…でも」

疑つてはいけない事を疑っていると分かっていた。それでもウルビダは言わずにはいられなかった。

「お父様は…本当に愛してくれているのだろうか。グランのことを」

エイリア学園内でも、自らの本来の人格を保っているのはマスターランクに属する者のみ。さらにその中でグランと父の関係の秘密を知っている者は、本当に僅かしかない。

確かガゼルは知っていたが、バーンは知らなかった筈だ。

「愛してますよ、間違いない」

研崎は即答する。

「その愛がどれだけ身勝手なものでも。誰かの身代わりであるとしても…ね」

グランは身代わり人形にされている、と。自分は激昂して、円堂達にその言葉を漏らしていた。彼もそれをどこかで聞いていたのだろうか。

ウルビダは唇を噛み締める。どうしてグランは自分達の目の前に現れたのだろう。父や自分達にとっては幸せでも――彼自身にとつては不幸でしかなかったのではないか。

父と出逢わなければ、彼はきつと、こんな虚しい愛を知らずに済んだらうに。

「……言伝、頼む」

やめよう。不毛な事ばかり考えても埒があかない。父の愛を疑う事は、そのまま自分達の存在意義を揺らがす事になる。だから考えるべきじゃない。最初から理解していた事だ。

これ以上会話を続けたらまた余計な事を口にしてしまいそうで――ウルビダは男に背を向けた。

「ウルビダ様」

その背中に、静かに投げられる声。

「私もずっと、貴女方にお訊きしたいことがありました」

何を？と尋ね返す前に、続きは紡がれていた。

「貴女は。貴女達は……私を、恨んでいますか？」

ウルビダは――何も言えなかった。あまりに唐突すぎる質問に、面食らったのもある。何より。

普段平坦な研崎の声が――ほんの少し、震えていたせいもある。振り向けなかった。今彼がどんな顔をしているか、容易く想像がついたから。

「…恨んでいない筈、ないですね。私と二ノ宮がいなければ、こんな事にはならなかった。旦那様の復讐心に火がつく事も、貴女達が誰かの道具になる事も」

ふっ、と自嘲する気配。

「忘れて、下さい。伝言は受け取りました。必ず旦那様にお伝えします。…その代わりと言ってはなんですが、貴女に受け取って頂きたいものがあります」

ウルビダは振り向く。その時にはもう、研崎は普段の無表情に戻っていた。男は周囲を窺い――さっと、小さなものをウルビダの手に握らせた。

「これは…」

「時が来たら…研究所以外のパソコンで開けて下さい」

USBメモリである事は感触で分かった。

どうやら、相当重要で、かつ二ノ宮に見られたらマズいものであるらしい。何故自分に、と思ったが。質問の全ては、射抜くような研崎の目に封じられた。

「…行きなさい」

離れる手。そのまま有無を言わず言葉で背中を押され、歩き出すウルビダ。だから、その先の研崎の呟きを、聴く事は無かった。

「私もいずれ、私でなくなるでしょう。だから…」

言葉は、溶けて、想いと共に消える。

「これは、私の…最期の意志」

蹴ったボールは、思っていたよりずっと左に逸れた。

「あっちゃ…」

土門は思わず声を上げる。ゴールポストを外れたボールは、だいぶ遠くまで転がっていつてしまった。あれは拾うのが面倒だ。

しかし、陽花戸中に居候させていただいてる身、借り物を粗末に扱うわけにはいかない。そうでなくとも一サッカー選手としてボールを大事に扱うのは大前提だ。土門がボールを取りに駆け出そうとした時、そのボールを拾う手があった。

「絶不調だな、土門」

一之瀬だった。校舎に用があると言っていたが戻ってきたのか。土門は苦笑して、さんきゅ、と手を上げる。

「俺は元々守備担当要員よ？シュートは苦手なのー」

「シュートが苦手でもコントロール音痴は駄目だろ土門サン？聖也になっちまうぞ」

「うわぁ、それすごい嫌だわ」

「はは」

いつもと同じ、じゃれあうような会話。しかし今はどちらにも覇気がない。それもそうだ。あんな事件があってからまだ何日も経っていない。

「振り切りたくてさ。みーんな、ガムシヤラに練習すんだけど」

土門の視界の端。ランニングに励む一年生ズが見える。走るのが大嫌いな壁山すら、前を向いて必死に手足を動かしている。

「やっぱ、無理なんだよな。つい考えちまって…調子、落としてる」
「それが当たり前だと思うよ」

一之瀬は砂を払って、ボールを抱える。大事そうに、まるで慈しむかのように。

「俺達にとってそれだけ大きな存在だったんだ。風丸も…円堂も」

風丸が死んだ。だが、実はもつと昔に死んでいて、二ノ宮に生き返させられた存在だった。そしてその遺体は持ち去られてしまった。

円堂が受けたショックを思うだけで死にそうになる。風丸の運命を変えてしまったこと。風丸を護れなかったこと。それだけではない、グランのことも相当気に病んでいるに違いないのだ。それら全てに責任を感じて、ついに沈んでしまった…太陽。

自分達みんなに今、夜が来ている。円堂に頼りすぎないようにしよう、重荷をかけないようにしようと決めた矢先にこれだ。結局自分達はみんな円堂の強さと明るさを支柱に立っていたのである。円堂が折れたことで、みんなが心を折ってしまうなんて。

「苦しい、とか。悲しい、とかさ。もつと言ってくれればいいのにな」

土門は胸の内を吐き出すように、言う。

「俺達みんなが…円堂に弱音を吐けなくしてるんだろうな。…無意識だってんだから、余計質悪いぜ」

いや、それは円堂に限ったことでもないのだろうか。
風丸だってそうだった。鬼道だってそうだった。吹雪だってそう
だったし、今自分の目の前にいる一之瀬だって、そう。

自分の中の辛い気持ちを溜めて、溜めて、パンクするまで溜め
ぎてしまう。何故だかそんな面子ばかりがここには揃っている。

「助けて欲しい時に、助けてって言えない奴らばかりだ」

それは強さかもしれないけれど。本当の強さとは、違う気がする
のである。おかしい話だ、ここにいる誰もが仲間を想い、信賴して
いる筈なのに。

ダンッ！！

「ん？」

不意に大きな音がして、土門はそちらを見た。校舎脇の木に、タ
イヤがぶら下がって揺れている。その前でひっくり返っているのは
――。

「立向居？」

どうやら彼は、見ている土門と一之瀬に気付いていないらしい。
頭をさすりながら立ち上がり、もう一度構えをとる。

そしてタイヤを思い切り吹っ飛ばして――！！

「マジン・ザ・ハンドー――！！」

技名を、叫んだ。土門は息を呑む。それは彼の特訓方法が、円堂

と同じだったからばかりではない。

重なったからだ。かつて世宇子を倒す為、マジン・ザ・ハンドを拾得しようと必死でもがいていた――円堂の姿と。

「あいつ…」

パワーが集まる。立向居の体が光り始める。

だがそこまでだった。目標に向けて放とうとしたエネルギーは寸前で霧散して、立向居の体はタイヤに跳ね飛ばされる。悲鳴を上げて転がる少年。しかし。

「諦め、ない…」

すぐに、立ち上がる。ボロボロになりながらも。

「絶対に、諦めないぞ……!!」

それは。自分達を知る円堂の姿、そのものだった。諦めない心こそ力になると、そう自分達に教えてくれた彼の姿がそこにあった。魂は、間違いなく受け継がれている。喻え立ち止まり、折れる事があつたとしても。

「…そうだな」

一之瀬の声が、土門の耳に届く。

「俺達…諦めないって決めたんだよな。ただ試合に勝つてことだけじゃない」

立向居が思い出させてくれた。

自分達の、あるべき姿を。

「みんなで幸せになることを。希望を。…諦めない事が、大事なんだ」

円堂は必ず立ち上がる。だから自分達も立ち上がらなくては。前にも後にも、絶望は広がるとしても。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866y/>

この背中に、白い翼は無いとしても。 5 《第四章～どうか壊さないで、貴方の

2011年12月30日11時45分発行